



謙澄と近人々

題字
棚田看山

その6

井上馨かたむね (写真左 1836~1915)

は長州藩出身の政治家である。明治維新後、政府の要職を歴任し、元老として政財界に重きをなした。また謙澄の岳父である伊藤博文とは若い頃からの盟友だった。

明治9年、井上は日朝修好条規(朝鮮の開国を求める条約)締結のため副全権弁理大臣として訪朝するが、謙澄もこれに同行した。互いを深く知ったのはおそらくこの時だろう。

明治28年、二人は再び外交の場であつた。法制局長官となつていた謙澄は、朝鮮政府への資金貸付交渉のため訪朝する。この時、朝鮮に駐在していた特命全権公使が井上だった。交渉は難航したが、最後には二人の巧みな連携でまとめ上げた。

井上と謙澄の協力関係は外交面だけではなかった。明治20年、井上は自邸の茶室開きに明治天皇を招いて「勸進帳」などの歌舞伎を上演した。庶民の芸能だった歌舞伎を天皇が鑑賞するのは初めてだったが、この天覧劇を演出



したのが謙澄である。謙澄は井上らと演劇改良会を立ち上げ、歌舞伎の近代化に尽力していた

が、天覧の成功で歌舞伎の社会的地位は大いに上がった。

井上は日本の伝統文化に造詣が深く、茶道に通じ、日本の古美術のコレクターでもあった。一方、西洋文化の導入にも力を注ぎ、欧化政策の推進者としても知られる。

井上 馨

～日本文化を愛した明治の元勳～

和洋の文化に精通する点で、謙澄と共通し、意気投合する面も少なくなかつたと思われる。しかし、二人の関係は、常に円満だったわけではない。若い頃、謙澄は洋行に同行させる約束を反故にした井上に不信感を抱いたことがあつた。一方、鹵に衣着せぬ政府批判をしていた若き謙澄を、井上が快く思わない時期もあつた。

こうしたわだかまりが、その後、完全に解消したかは定かでない。しかし、互いの能力や志について、認め合っていたからこそ、手を携えて日本の近代化のために働き、成果をあげることができたのだろう。

余談であるが、行橋町の発展に貢献した豪商柏屋の8代柏木勘八郎は、井上馨の甥にあたり、勘八郎が明治43年に行橋電燈株式会社を設立した際には、井上がその後ろ盾となつた。

(文化人末松謙澄を考える会 小川秀樹)